

よろづ屋菓子舗の

ルーツと菓子木型

新得町郷土研究会 佐々木

健

はじめに私の父が屈足市街で和洋菓子店を営むことになった経緯からお話をします。

屈足市街地は戦後、十勝川上流地帯の森林資源やダム・発電所建設などの開発で、急速に発展していきました。国有林を管轄する新得営林署には三〇〇人を超える職員が働くなど、将来的な人口増と商工業の発展を見込んだ祖父母らが、足寄町から縁故者のいない屈足へ移住したと伝え聞いています。「よろづや菓子舗」（保管している当時の名刺に記載）という屋号で、和菓子やパン、食料品、たばこなどあらゆる商品を販売する雑貨店を営んでいました。（写真1）屋号のよろづは祖父の萬（よろづ）から付けたものです。屈足地域の人たちからは誰もが知る「よろづやさん」と呼ばれていました。

佐々木家のルーツを簡単に紹介します。私の祖父佐々木萬（よろづ）（明治二十七年八月二十七日生）は、宮城県遠田郡涌谷（わくや）村（現在の涌谷町）で出生しました。明治三十五年に新得町に入植した「悲願桜」で知られる開拓者伊藤傳五郎さ



写真1 昭和34年ころの「よろづや菓子舗」の全景

んと同じ村から入植しています。妻まさよと大正初期に足寄郡足寄村大字足寄村字上足寄（現在の足寄町）に移住し、この地（宮城部落）で農業を営んでいました。父佐々木萬喜（まんき、享年七十一歳）は、五人姉弟の長男（上から三番目）として、大正九年二月二十五日に足寄村字上足寄で出生。昭和二十七年三月十四日、両親と妻いづ子・三人の子ども（長男満、長女まち子、二男喜彦）を連れて、新得町字屈足基線十五番地（現在の柏町二丁目）に住居を構え、商店を開業しています（萬喜三十二歳のとき）。私は四人姉弟の末っ子として、二十八年二月十三日に屈足でうぶ声をあげました。私が生まれたのは現在ある「コミュニティーハウスあいの郷ふれあい」の所です。屈足地域の高齢者の介護予防拠点となる「生きがい通所施設」として二〇〇二年（平成十四年）十二月にオープンしました。時折、この場所を訪ね居間に座ると自宅にいるような懐かしい感覚と子ども時代の昔を思い出します。

わが家に保管してある古いアルバムを見ると、父が十五才の頃（昭和十年）、網走市内にある塩田さんという和菓子専門店で和菓子などの作り方を学んでいます。（写真2）中学卒業後に修業に入ったものと推定されます。何年間網走で生活していたかは不明ですが、太平洋戦争（昭和十六年）に召集され（二十一〜二十五歳ころ）、ジャワ島（インドネシア）方面で衛生兵（伍長）としてお国のために働き、戦後の二十一〜二十二年ころに帰国（推定）しています。網走市郷土博物館に確認しました（令和三年十一月九日）。同館に保管されていた、東京交通社（昭和七年発行）の大日本職業別明細図には、北海道網走



写真2 昭和10年ころ塩田菓子商で修業中の父(写真左から2人目)

町南五条三丁目、菓子商（屋号は、やまいち）塩田辰次郎と記載されていた。

町内の新得駅前にあった「新月菓子店」（本通南一丁目）の和田勇三郎さんや生菓子店「桃太桜」（ももたろう）の中村豊さんらが、菓子職人講師を招き研修した当時の写真がありました。（写真3）お菓子屋全盛期の四十年代には、和菓子のほかに食パン・あんパン・あめ玉など多くの商品を作っていました。十二月にはクリスマスケーキも作って販売していました。（写真4）売れ残ったケーキ



写真3 新得駅前「新月菓子店」で菓子職人講師を招き研修中の父(写真後列左)

は子どもたちが一人一個もらい、チョコレートなどをデコレーションして食べていました。菓子屋の子どもならではの特権でした。入学祝いや婚礼などの内祝い品に使うタイの落雁（らくがん）作りにも小学生だった私も手伝っていました。タイの注文が一度に七、八十個も舞

い込んだ。出来上がった落雁を菓子木型からはずし、タイ本体にピンクのスプレーをかけたり目玉に黒い墨を付けたりするの子どもたちの仕事でした。ここで、本題の「菓子木型」の話をします。両親が他界したあとの平成十年ころに店を解体しました。物置に保管してあった菓子木型を自宅へ持ち帰り物置に保管していました。大きいタイの木型は兄弟四人が一つ



写真4 父が作っていたケーキ

ずつ思い出に持ち今日に至っています。菓子木型は大小合わせて四十五個あります。（写真5）大きさもいろいろで、最も大きいタイの型は長さが三十六センチ、彫りは精巧に作られています。婚礼や出産のお祝い品として欠かせない縁起物として使われていました。木型には、でんぷん質の粉を詰めて固めるらくがん用の型で、タイやツル、亀の甲羅の模様などのめでたいものや、四季や花鳥風月などが多く用いられています。木型に使われる材質は硬くて適度な耐久性があるヤマザクラが多いとされています。



写真5 「よるづや菓子舗」で使われていた「菓子木型」

ある文献で調べてみますと、和菓子づくりに欠かせない菓子木型は、江戸時代に発祥したと言われています。平成十一年には、香川県知事が「菓子木型」を伝統工芸に認定しています。伝統工芸としての菓子木型には、タイやツル、カメ、花などの図柄を何種類ものノミや彫刻刀で、左右を逆に彫って製作します。完成した木型を二枚重ね、砂糖や餡（あん）などの材料を入れて抜き出すと様々な形の和菓子ができあがります。決して表に出ない地味な存在の菓子木型ですが、人々の目や舌を愉（たの）しませてくれる和菓子になくってはならない存在になっています。骨董品店ではたまに中古品を販売しているのを見かけますが年月が経つにつれ、その存在感が無くなってきたように思います。「これはどうやって使うモノ？」などと忘れ去さられないように、新たな使い道を考えてみたいと思っています。



紙粘土で当時の落雁を再現